

昭和三十九年三月

宮崎県文化財調査報告書 第9輯

宮崎県教育委員会

昭和三十九年三月

宮崎県文化財調査報告書

第九輯

宮崎県教育委員会

目次

一、小林市中山前遺跡調査	文化財専門委員	石川 恒太郎
二、小林市尾中原発見の地下式横穴	県立博物館学芸員	栗原文藏
三、飯野町のキンメイモウソウチク（金明孟宗竹）	文化財専門委員	平田 正一
四、大淀川上流のオオヨドガワゴロモ自生北限地	文化財専門委員	平田 正一
文化財専門委員	平田 正一	宮崎大学学芸学部
中山至大	中山至大	宮崎大学学芸学部

# 小林市中山前遺跡調査

## 一、遺跡の所在

小林市の中山前遺跡は同市の県立種馬所の東方にあり、小林市大字細野字中山ノ前五、六九六番ノ二の畑地で、同地の内村秀雄氏の所有地である。

発見の動機は、遺跡のある土地は桑畠となつておらず、耕作中地下に多くの石が敷いてある部分のあることを発見し、これらの石を掘り出して車力一台をもつて自宅に運んだが、このことが市に報告され、市教育委員会より県教育委員会に報告され、これが調査を求められたのであつた。

それで昨年（三十八年）十月予備調査を行つたが、遺跡の所在地は北、東、西に谷をめぐらした舌状丘地の北寄りの斜面に近く、耕作者について石の存在した状況を現地で聞いたが、その語るところによれば次の通りであつた。

「地表下約一米の所に直径三〇釐内外、大なるものは四〇釐ぐらいの川原石が、直徑五米内外の範囲に敷いてあり、表面は平たくしてあつた。また中央あたりに排水溝のように小さい川原石が敷いてある場所があつた。またその外側に穴のような所があつた。」

実際に数十個の石がその北側のまだ原野のまま残されている部分に置いてあつた。何れも人が一人で運び得る程度で円味のある川原石であった。それで試みに石があつたという場所の続きを掘つてみると、なおそこに石の存在を認めることができた。そこで耕作者が石が埋没していたという範囲を見るに、直徑四五メートルあるので残りの原野（未

開拓）の部分を掘れば遺跡の全貌を明らかにし得るものと判断した。

## 二、発掘調査

畑の所有者は桑をここより自宅に運んで蚕を養う代りに、自宅の蚕室をここに移して養蚕することが、より合理的であるので、この地の調査を早くして貰いたいと要望されたので昭和三十八年十一月十四日、日高正晴、寺原俊文両氏とともに現地に出張、小林市の志戸本次助、中島保、その他の諸氏立会のもとに発掘した。

そして石の存在状態を明らかにするとともに附近の状況を調べたが、この台地一帯に繩文土器片の散布が多く、また畑の所有者内村氏方にも石斧や繩文土器破片が多く採集されていたが、それらはみなこの畑や台地から出たものであった。従つてこの台地にはかつて繩文期の人々が居住または往来したことが知られるのである。

この遺跡の存在する土地はこの台地が南から北に傾斜しかけているところで、つまり台地の周縁部に当つている。地層の状況を見るに、地表から約一米の深さに腐植土層（黒色）があり、その下にローム状の黄褐色の土層があり、この層は三〇釐内外で徐々に黄色の粘土質土層（基盤）に移行しているが、これらの石はこのローム状地層の中に置かれていた。

石の存在する範囲は直徑五メートルの半円状で、北方に当つて木炭の多い所があり、ここに土器の破片が多く遺存していた。しかし降雨のため作業を妨げられたので調査を後日に残して引揚げたのであつた。

この時この遺跡から見出された石器および土器は図版および拓影に

示す通りであったが、これを持ち帰つて詳細に調査した。

まず石器についてみると、図版に示す（1）は刷石で、長さ八纏、巾六・五纏、厚さ四纏ぐらいで両面に滑らかにされた部分があり、これを器台に使用したらしく両側が削られて一面は削り込まれている。もちろん刷石は食料を石皿の上ですりつぶした道具とか、獸類の皮のしわを伸ばすのに用いたとか言われる石器である。

（2）は丸石の一角を打ち剝いだ剝片で一方に丸味があり一方は刃をなす蛤形の石器で、長六・五纏、刃渡八纏、厚さ中央で一纏ばかり、物を斬る道具で石斧の一種と思われる。

（3）はうすい剝片であるが一方が鋭い刃をなしている。長さ九纏、刃の巾六纏、厚さ五耗ぐらいでこれも石斧の一種であろう。

土器片は三個以上の壺形または壺形と思われる土器の破片で拓影Iに示したもののがそれである。このうち（A）は肩部か、あるいは腹部から底部に曲る部分か判らないが、分厚で文様はない。（B）は口縁部破片で、直口に近く、その断面は丸く、表面に張りつけの突起文があつて、このため器の口縁は諸所に突起を生じている。そして口縁に貝殻施文がなされており、この貝殻文は突起の上にも施こされている。（C）はその裏面で、草の葉のような織維文が見られる。（D）は腹部あたりの破片で僅かな線文があり、（E）はその裏面である。

（F）は底部の破片で、断面図に示すごとくやや斂が出ている。この破片の円い線を延ばしてみるとFに示すごとく底の直径は一一・五纏となり、底はかなり大きいことが知られる。

なおこれら土器片の表面には煤が堅く付着していることは重要な事実として注目すべきである。

昭和三十九年二月七日私は再び出張を命ぜられて現地に至り、小林市公民館長中島保氏らの立会のもとに前に発掘した残りの部分を掘つた。その作業中に前に土器を発見した所の附近で土器片や石器を発見

した。

石器は直径一〇纏ぐらい厚さ三纏ぐらいの刷石（磨石）で、刷石としては扁平なのが珍らしい。扁平な両面が滑らかに磨かれているが、火に会つたらしくやや赤く焼けている。また図版の石器（3）と同じような剝片の鋭い石器が二個あつた。

土器の破片は相當に多く見出されたが、そのうち文様の明らかなものは拓影IIに示すようなものである。このうち（G）と（I）は殆んど似た口縁部であり、（H）は拓影Iの（B）と同じ器の破片と思われる。（J）と（K）は沈線で、（J）は肩または腹部の文様のようであり、（K）は口縁部である。これによつて見れば（G）や（I）は鋸歯状の口縁をなすわけであり、（H）もその一部であるかどうかは明らかでない。

次に石の敷かれている範囲は平面図に示すごとく極めて不規則である。但し（A）と記した空地附近は沢山の石を掘り上げたところで、この部分は「石を二重もしくは三重にして表面が平らになつていた」という耕作者の言を信ぜねばならない。

いま仮りに石のある範囲の中心線を定めてOO'とすれば、このOO'線は南北の線より四五度東に傾いている。そしてOの部分より南側は桑畠となつていて発掘し得なかつたが、石の残存する範囲を円形で包めばOO'の仮定線で結ぶ直径六米の範囲となる。そして（B）(b)(b')は穴であるが、ここはもと松林があつたので松の根の入つていた跡があり、この穴がピット（桎穴）であるかどうかは明らかでない。しかし、前に述べたごとく（B）(b)附近に木炭片や焼けた土、煤の附着した土器片等が多く存在したからここに炉があつたことは確かである。

しかしこの石の残存状態を大観すれば、OO'（小さい円）の仮線で包む範囲に石が集約的に置かれており、その他は疎らに散在していることが認められる。そしてこの円は直径四・二米となる。

### 三、遺跡と年代の考察

この遺跡は一体何であるかが第一に問題であるが、このような敷石のある古代の遺跡は、床面に石を敷いたいわゆる敷石住居址か、あるいは用途不明の敷石遺構と称されるものか、その何れかである。敷石遺構は、配石遺構や環状列石などと関連のあるものと言われ、石は一定の区域に敷いてあるが、當時使用したと思われる炉址がなく、火を焚いた痕跡がなく、あるいは僅かな木炭が発見される程度であることがその特徴である。

一方敷石住居址には、そのほぼ中央に石でかこつた箱状の長さ一米未満の炉があり、その底には小さい川原石が敷いてあるのが特徴で、床の敷石は直径三〇糪内外の丸い川原石を用いるのが普通である。

しかるに前に記したごとく、この遺跡の敷石は直径三〇糪内外の丸い川原石であり、耕作者の語るところでは、そのほぼ中央の図版（A）附近に小さい川原石を敷いた排水溝のようなものがあったというから、これは上にあつた箱形の石を取り去ったので底部に敷いてあつた小さい川原石の部分が矩形に残っていたものであろう。このように見てくると〇〇の範囲は敷石住居址と見ることが妥当のように思われる。問題は（B）附近の炉跡を如何に考えるかということであるが、それは後で考察することとして、この遺跡の観察を進めよう。この遺跡からは石器や土器を発見した。石器は刷石二個と打石の石斧四個であった。刷石が食料を石皿でつぶすに使用されたにしても、あるいは獸皮のしわを伸ばしたにしろ、それは石器時代の人の生活に直接必要な道具であり、石斧また然りである。

またここからは焼けた土や木炭片も見出され、出土した土器の表面には煤が厚く付いていた。このことは、この土器が物を煮るために使用されたことを示すものである。このように、この遺跡から見出された石器や土器はこれが古代人の生活の場であつたことを示している。

すなわちこの遺跡は敷石住居址である。

そこでこれが敷石住居址であるとしてその形態を考えるに最も重要な中央部が破壊されているから確言することはできないが、大体において円形もしくは橢円形で、（B）は恐らくピットの一つであろう。この穴は直径四五糪、深四〇糪でAの方向に傾斜する柱が想像される。また耕作者が（A）の右上（西方）あたりに穴があつたと語つた言葉が思い出される。この東方と南方が桑畠で掘れなかつたことは遺憾で、若し掘ることができたならばピットの発見ができたかも知れない。

ただ前に述べたごとく、この遺跡はローム状の土層の中にある。普通の土地においては大抵ローム層の上（腐植土層の下）にあるから穴には上の黒土が詰まっているので発見が容易である。しかるに、この遺跡はローム状土層の中にあり、しかもこのローム状土層は自然的に下の粘土質土層に移行している。つまりこの遺跡は黄色の粘土質土層の上に設けられているのであるが、上からローム状土層に蔽われているので穴に入り込んでいる土の色は若干褐色を呈しているだけであって発見に困難である。従つてピットの発見が少なかつたのである。

それにしても、この遺跡がローム状の土層の中にあるというのはどういうわけであろうか。ここは霧島山を眼の前に見るところ、つまり霧島の山麓に当る。そしてこのローム状土層は霧島山の噴火によつて堆積した火山灰の変化したものと思われる。すると、ここに住居ができるから、霧島山はしばしば噴火してここに火山灰を堆積させたことが知られるのである。

そこで前に残した問題、すなわち（B）（b）附近の炉址の問題を考えることとしよう。住居址には二個の炉址を有するものもある。しかし九州地方の住居址は殆んど屋内に炉を有しているという例から考

えて（B）附近の炉址はO-Oの住居の炉ではなく、O-Oの住居の炉は「排水溝のようなもの」であったとし、（B）をO-O住居のピットの一つと考へるとき、（B）附近の炉址をどう考へるかといふに、ここにも別な住居址が前にあつたが、霧島山の噴火のために焼失し、その後にO-Oの住居址が作られたものと解すべきで、この住居も噴火のため焼失したが敷石等は残つたものと考へるべきであろう。前に述べたごとく、この遺跡の地盤は南から北に傾斜しており、Oの点とOの点はかなりの傾斜がある。

つぎにこの遺跡の年代であるが、第一にこのような敷石住居址は繩文時代の中期以後のものが多い。さらに石器を見るに、刷石はこれまた中期から後期に多いものであり、剣片の石器また同様である。しかし注目すべきは土器であつて、拓影Iの（B）拓影IIの（G）（H）（I）などは、いわゆる波状口縁で、これに貝殻文をつけていた点が市来式と呼ばれる鹿児島県日置郡市来貝塚や串間市下弓田の土器と似ている。

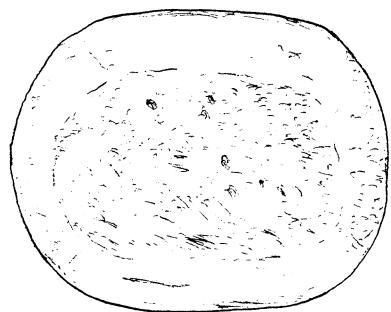
また拓影IIの（K）は口縁部に大きな二条の沈線を施してゐるがこれまた右の市来式に見られるところである。また拓影IIの（J）は平行的な沈線によつて菱形のような文様を描いてゐる点が大平式と呼ばれる串間市大平出土の土器に似てゐる。しかし大平式は二条の平行沈線で菱形や雷電形を描いてゐるが、この（J）は必ずしも二線ではなく、また中央のW M形も平行していなゝい点が大平式と異なつてゐる。このような二条の平行沈線による文様は、東諸県郡綾町尾立のいわゆる綾式Aと呼ばれる土器の文様にも見られるが、綾式Aにあつては二条の沈線に棱が出たり渦状となつたりしてて、この（J）とは多少異つてゐる。しかし系統としては綾式Aや大平に連なるものであると思われる。このような土器文様による年代は、繩文時代後期（約

四、〇〇〇年前）のものと見られるのである。従つて全体的に見てこの遺跡は繩文後期のものと考えられるのである。

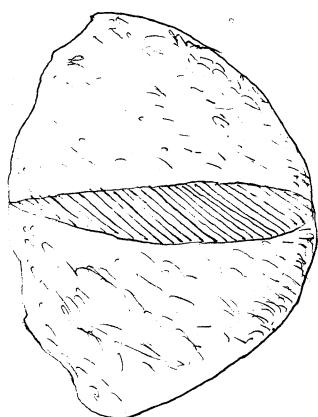
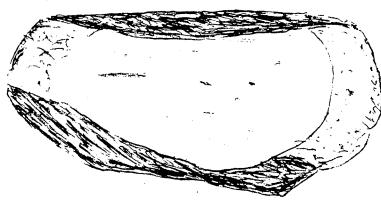
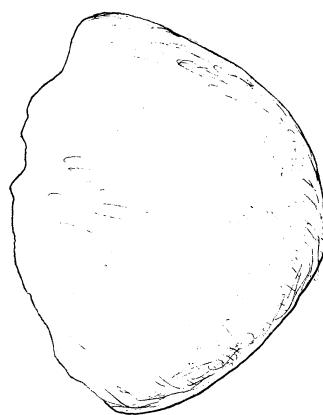
県文化財専門委員 石川恒太郎

小林市細野山中前石器

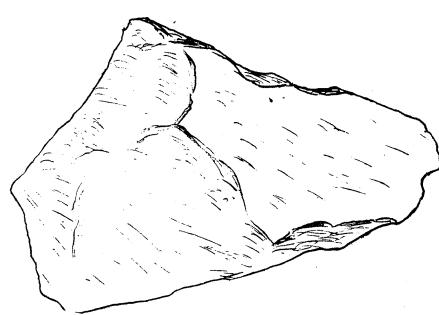
1.



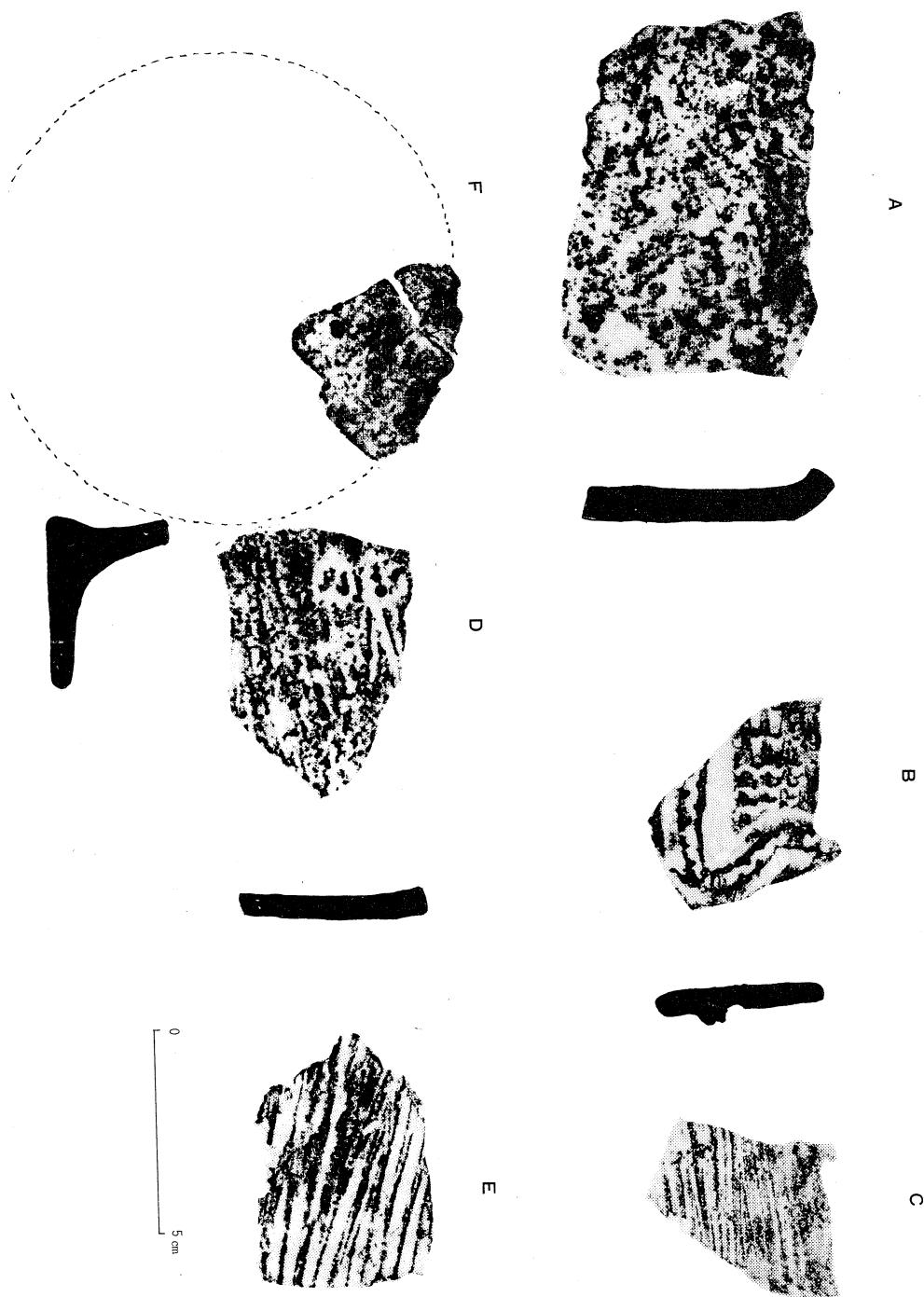
2.



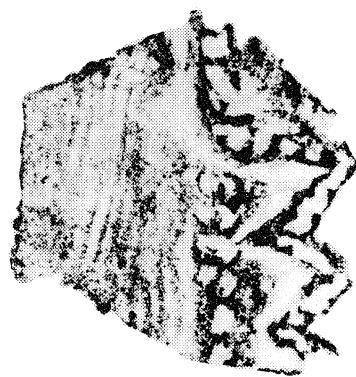
0  
5 cm



小林市細野山中前土器片 拓影1



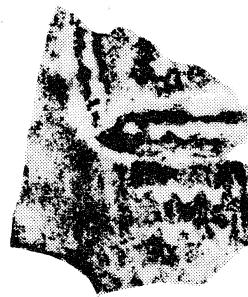
G



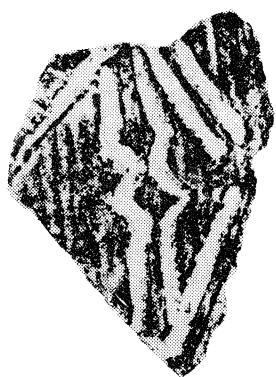
拓

影

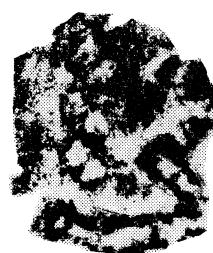
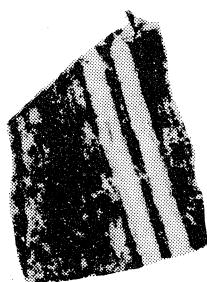
2



J

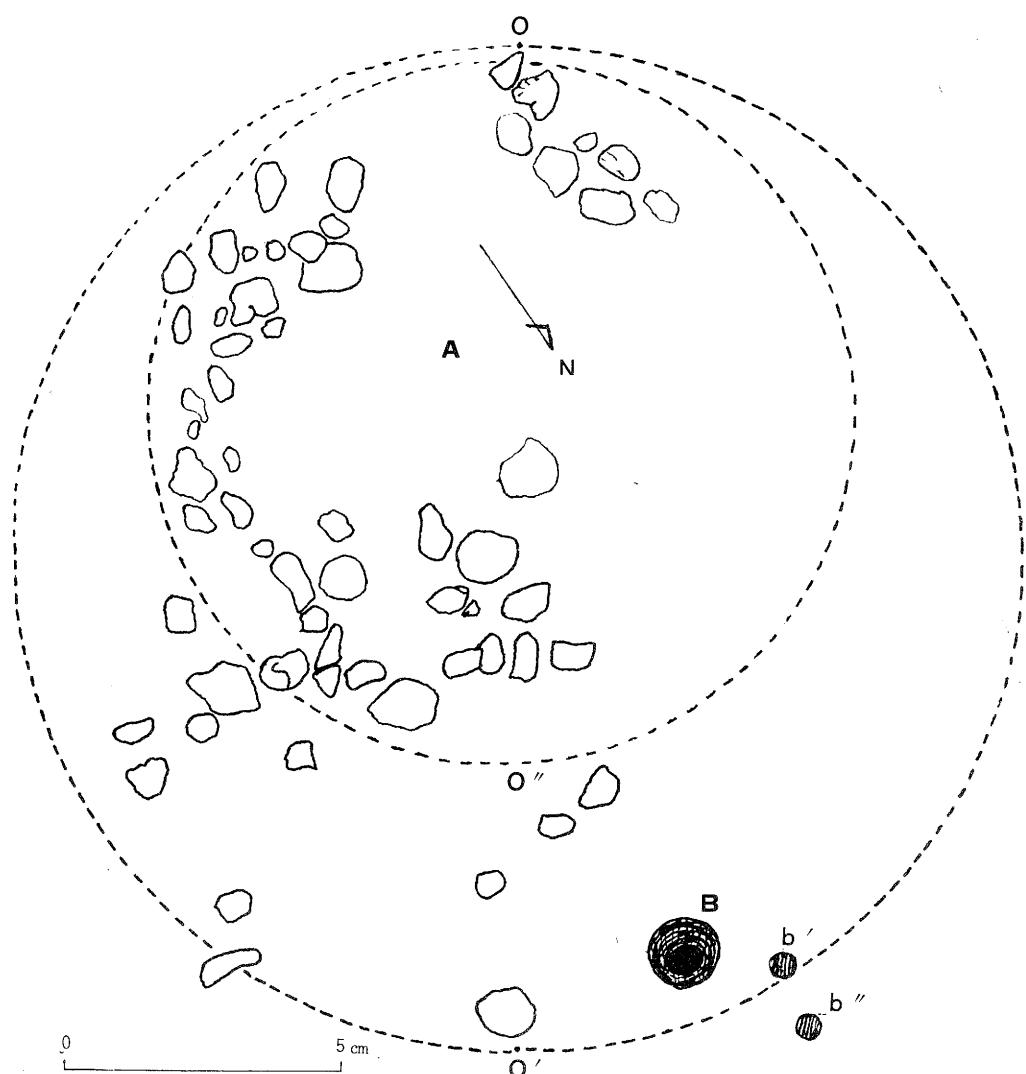


K



0  
5 cm

### 小林市細野山中前遺跡平面図



# 小林市尾中原発見の地下式横穴

## (一)

遺跡は小林市尾中原地内にある。小林から飯野に至る県道のすぐ東側で、標高一八〇米あまり、小高い台地の中央からやや南斜面にかけて遺構は造営されている。

発見の動機は、深耕作業中トラクターの爪に引っかかって、蓋石が掘り起こされたことに始まる。直ちに市教委を通じて県社会教育課に連絡があり、翌日栗原が派遣された次第である。

## (二)

遺構は第一図の如くで、地下式横穴である。小さな豎拡の入口は、平たい割石でふさがれており、すでに取り除かれていたがその石数から、当時は一段位に敷かれていた事が考えられる。豎拡は基底に近づくにしたがって、徐々に広がり、底部では一辺約一メートルの方形を呈する。北東に小さな入口があり、玄室へと続いている。玄室と前拡部との境には、格別間仕切り等の施設は認められない。ただ、直刀・剣・鍔等がいわこばの羨門部を塞ぐような形で検出されたのは、一応注目する必要がある。特に剣と直刀は切先を交叉させて重ねてあり、その長さは羨門一ぱいあり、多少位置が動いている事を考えれば、これらは玄室と前拡部とを隔離するために、意識的に配列された可能性が強い。

玄室は奥行一・八メートル、左側壁に多少のふくらみを持つが幅一・五五

メートル七五メートルを計り大略方形である。天井は家形をとるが、横に一本梁が通っている他は、寄棟造り等にはなっていない。屋根の樋が各壁に接する部分は、二種から一〇種の柵様になつていて、奥壁のそれは劍一、鍔二が載せられていた。鍔の矢柄の部分は下に転落していたが、接合してみると正しく同一個体であることが知られた。玄室に入つて右隅に、劍が一本壁にもたれてたてかけられていた。これも本来この様な位置に不自然に置かれていたものではなく、側壁柵に載せられていたものが、転落するひようしにこうなったのではないか。何故なら、その切先は玄室中央近くまで、二片になつて飛んでいたからである。

地表から、玄室床面迄は一、五五メートルを計る。底面は平坦で、排水施設等もなく、塗朱されている形跡もない。前拡部底面には、多少の朱が認められた。遺体については、何ら手懸りとなる資料は得られなかつた。

## (三)

出土遺物には、鍔、剣、直刀がある。第二図1～3は羨門部出土のもの、4・5は奥壁柵上に置かれていたもの。共に平根の鍔である。第三図1は剣で奥壁柵上に載せられていたもの、刃を立てて置かれていたために、身はよじれて姿は歪んでいる。注意すべきは鞘が五種程抜かれて副葬されていることである。2は同じく剣で、玄室右隅に置かれていたもの、裏面に尖根鍔片二を附着する。3は羨門近くに置か

れていたもので直刀、剣が切先を交叉して附着しており、裏面にはさらに尖根と思われる鑓片一が附着している。

#### (四)

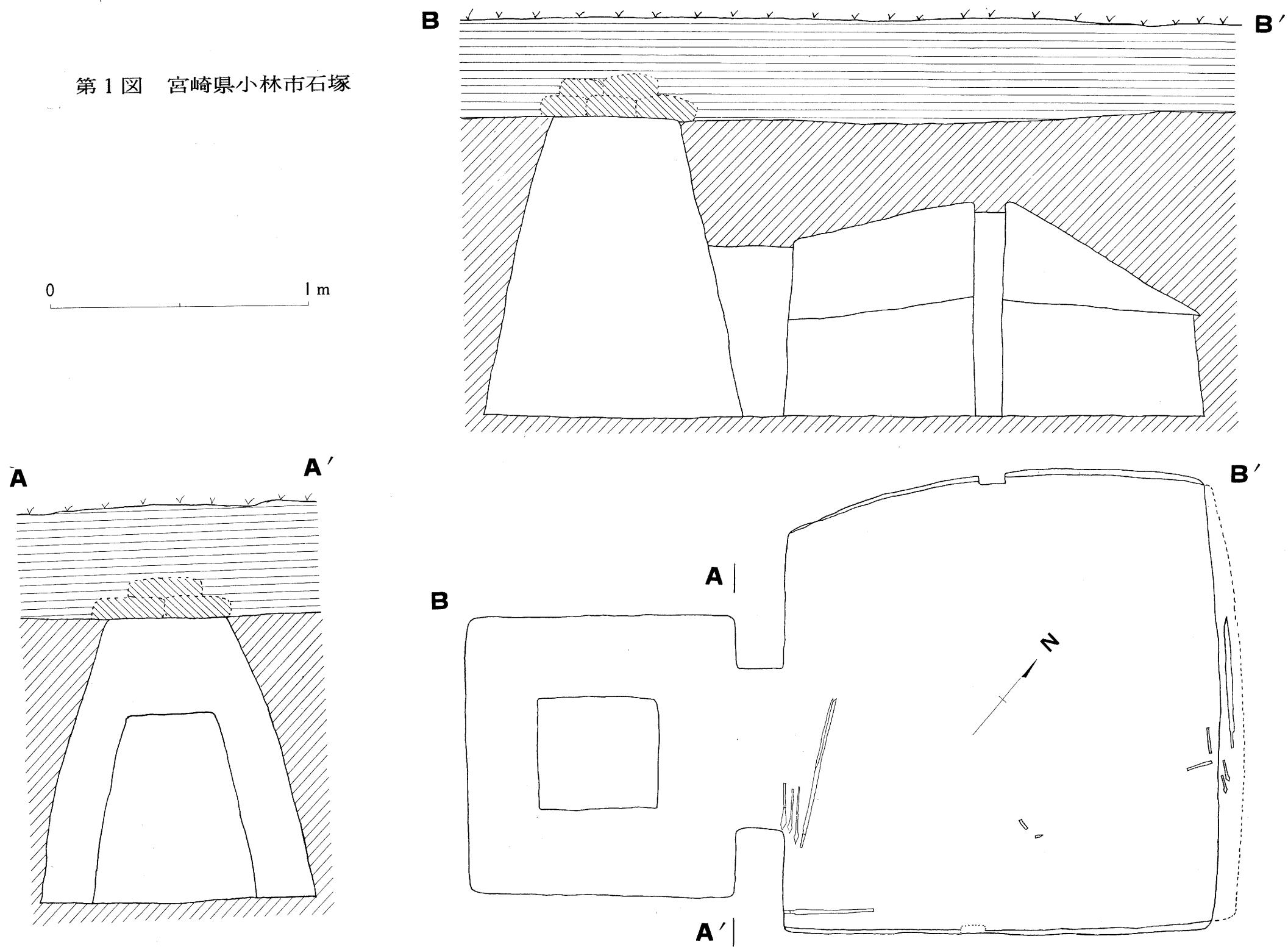
尾中原から発見された地下式横穴は、大旨以上の如くである。その被葬者については、知るべき何らの手懸りも残されていないが、強いて言えば女性ではなく、武人的な色彩を強く感じる。その葬法であるが、第一図の如く豎拡入口が非常に狭いことから、棺に入れてはとうてい搬入不可能である。直葬以外に考えられない。木棺を使用すれば剣が残るはづであるが、注意深い探査にもかかわらずそれらしい遺品は検出されなかつた。

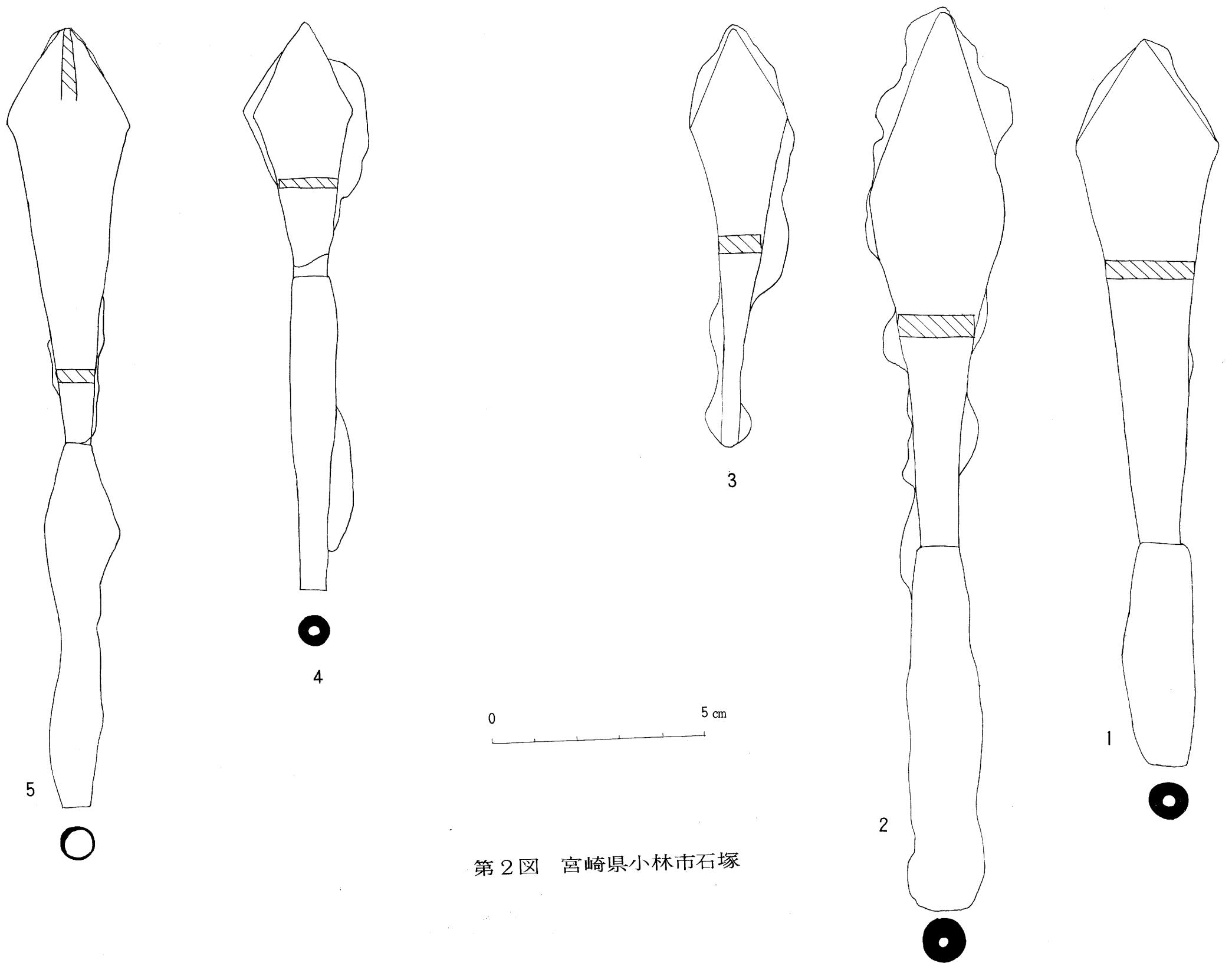
この地下式横穴の営まれた年代であるが、出土遺物は何れも古墳時代後期の特色を示している。しかし尖根の鑓が少く、剣の多いことなどから、あまり年代は降らないことが考えられる。六世紀中葉と言うのが大過ない所であろう。野尻町大萩の地下式横穴（県文化財報告五、昭和三五年）は、六世紀前半と考えられ、本例に先行するが玄室のプラン、副葬品等を比較すると形式編年が可能で、興味深いものがあるが、今は論及をさせて置こう。

地下式横穴は、宮崎の特色の一つである。古代日向解明の鍵の一つは、ここにあるといって過言ではない。偶然の機会ではあつたが、その有力な資料が闇に葬られずに、地主、市教委などの関心により、目の目を見るに至つたことを、非常な喜びと感ずる次第である。

県立博物館学芸員 栗原文藏

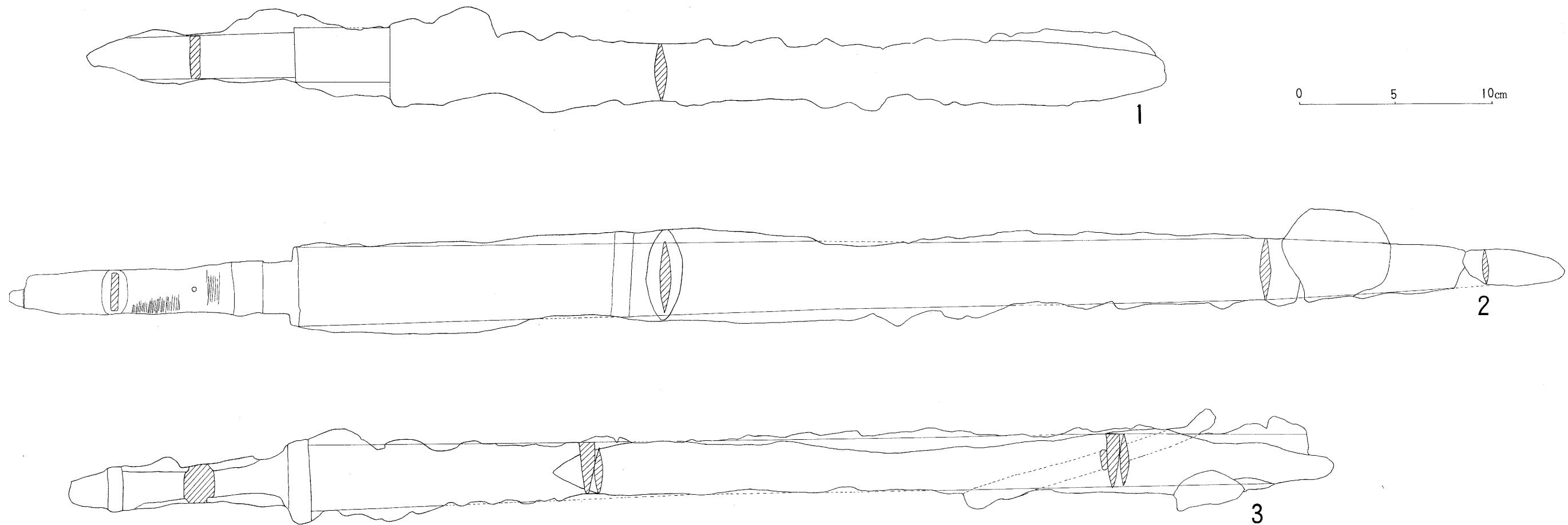
第1図 宮崎県小林市石塚





第2図 宮崎県小林市石塚

第3図 宮崎県小林市石塚



# 飯野町のキンメイモウソウチク（金明孟宗竹）

## 一、所在地

宮崎県西諸県郡飯野町大河平字平蔵野（所有者 斎藤彦二）

## 二、地目、地積

山林、二アール

## 三、形状

天然記念物指定の宮崎県東臼杵郡北川村祝子川のキンメイモウソウチクと全く同一の形状のものである。その形状についての詳細は宮崎県文化財調査報告書第一輯（昭和三十一年宮崎県教育委員会刊）に報告の通りで、ここでは省略する。

## 四、現状

飯野町にある本種の発生地は、大河平小学校裏のモウソウチク林中である。小学校から約五〇〇米余り距り、学校裏の竹林中を東に通ずる小道を通り、尾根に登りつめる。この尾根の北側が発生地である。北川村祝子川では、日当りのよい、南向の平坦竹林中に発生するが、ここでは日当りの悪い北面の傾斜地である。この斜面は下の凹地に連なり温度高く、林内は薄暗く、モウソウチクの発育旺盛で伸びのよい良質の材を林立している。竹林はモウソウチクの純林で、下草は足にかかる程度の貧弱なものである。この竹林中に現在三〇本のキンメイモウチクが混交して存在する。この変異株の源は尾根附近にあつたも

のらしい。鞭根の足跡は、ここから斜面を下り氣味に横走し、約五〇米に及んでいる。その巾は約五〇一〇米で、この間に発生株が立っている。この変異株は何れも勢力旺盛で将来続々繁殖の様子が認められる。

## 五、徵証

キンメイモウソウチクに関する文献には次の様なものがある。

- 1 中井猛之進 文部省天然記念物調査報告、植物の部、第十九輯、三六一三七頁、一九四二年
- 2 平田正一 宮崎県文化財調査報告書、第一輯、一一一一一三頁一九五六年。
- 3 室井綽 有用竹類図説、三二〇頁、一九六二年、六月社上田弘一郎、有用竹と箆、四七頁、一九六三年、博友社。

## 六、由来

この発生地を含む広大なモウソウチク林は、もと島津藩の配下の豪族大河平氏のものであった。大河平氏は大河平部落に権勢を張り現在の小学校の地に居を構え、邸の作りも全て頭首島津藩に模倣したという。この竹林はその当時鹿児島市磯公園から移植したものが親株となって現在の様になったと伝えられている。キンメイモウソウチクのこの竹林中における発生の起源は不明であるが、所有者の斎藤彦二氏（明治三十一年生）の言によれば、今から三十年ばかり前この変異株が竹林内に広く発生していたので、モウソウチクがこれ以上劣悪化しては

困ると思つて皆伐してしまつたという。現在発生のものは、その後残存の株から発生したものと思われる。昭和三十五年宮崎大学農学部重松義則教授の調査の結果、本種がキンメイモウソウチクなることが確認され、初めて一般に広く知られる様になつたものである。

## 七、保存の要件

キンメイモウソウチクは珍奇なモウソウチクの変種として、現在次の四ヶ所が天然記念物指定を受けている。

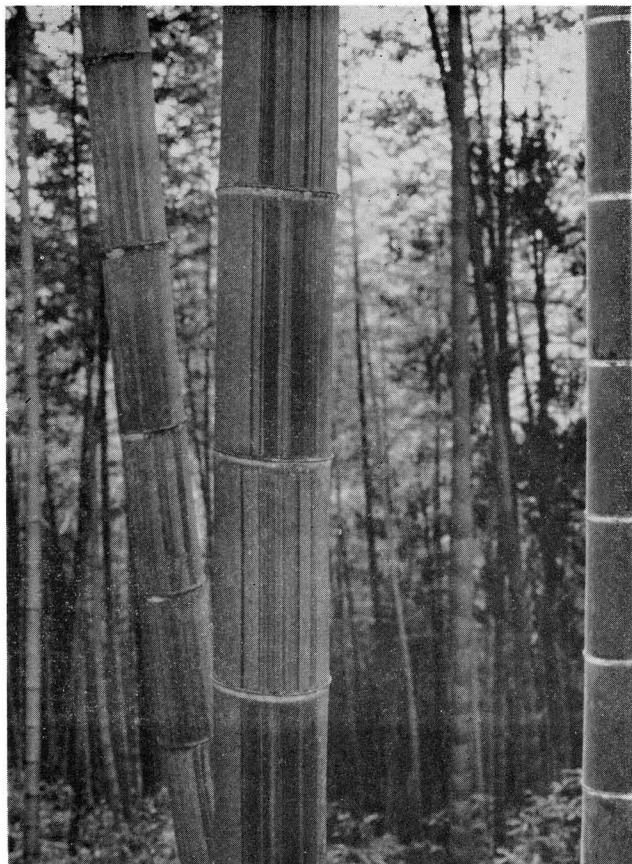
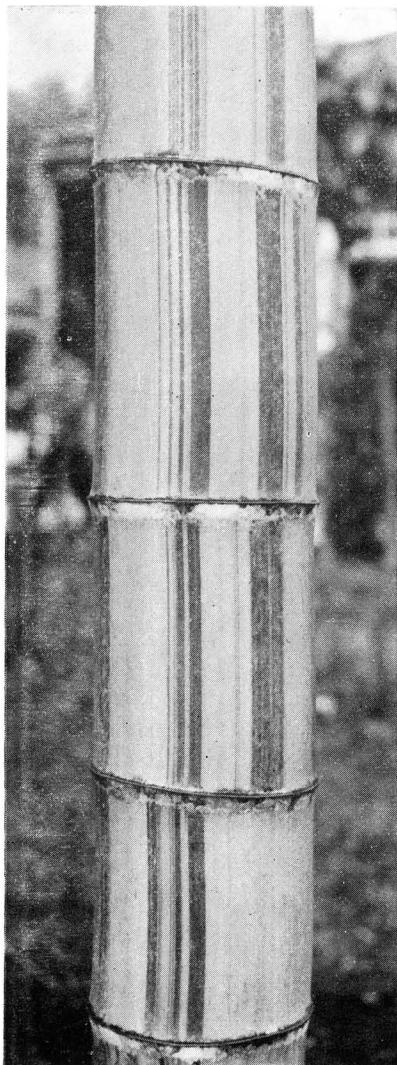
- 1 高知県高岡郡日下村（昭和一七年指定）
- 2 福岡県三井郡御井町（昭和一二年指定）
- 3 福岡県遠賀郡岡垣村（昭和一二年指定）
- 4 宮崎県東臼杵郡北川村（昭和三七年指定）

飯野町のキンメイモウソウチク発生地は、既に天然記念物指定を受けたものに比較して次の点において優れているため、指定によつて保護することが適當であると考えられる。

- 1 発生の本数が多く、将来の繁殖も旺盛と考えられ保存には極めて適している。発生域のモウソウチク林は広大で、タケの發育に最適地であり、従来の変異株の旺盛な発生状況から考えて、将来著しいキンメイモウソウチクの林となりうる可能性が十分にある。
- 2 天然記念物の活用に便利である。発生地は日豊線飯野駅および飯野町中心部からいづれも五糠前後であつて、飯野駅から宮崎交通会社のバス便によれば大河平小学校の現地迄達することができるので交通便である。これは学術上その他の利用価値を著しく高めるものと思う。

文化財専門委員 平田正一

キンメイモウソウチク



飯野町のキンメイモウソウチク林



# 大淀川上流のオオヨドカワゴロモ自生北限地

## 一、所 在 地

- 1 宮崎県北諸県郡岩瀬川の内、野尻発電所野尻ダム堰堤の下流一秆半の地点より、岩瀬橋北方一秆の地点に至る、約三秆の河川水域
- 2 宮崎県北諸県郡辻堂川の内、高原発電所ダム堰堤より上流二秆におよぶ河川水域

## 二、現 状

日本産のカワゴケソウ科植物は從来二属六種が知られていたが、宮崎県大淀川上流に産するカワゴモは既産のものと異なり、京都大学教授今村駿一郎博士の研究によると、本種の子房は扁平で、胚珠数は他の那種種の二倍、即ち四〇個で他種の約二〇個に比較して明らかに別種のものであるという。同氏はこのカワゴモの和名をオオヨドカワゴモと命名し近く新種として学会に発表の予定である。この報告では以下本種をオオヨドカワゴモとして記載する。この種は水生の顯花植物で一般の高等植物に比載して珍奇な形態をしている。全形は葉状地衣類に似ており、濃緑色の葉の様に広がった葉状体は根であつて、この植物の主な合成器官となつている。葉状体は河川の急流(秒

## 三、現 状

オオヨドカワゴロモは大淀川の上支流、岩瀬川および辻堂川の急流岩石上に局地的に繁殖している。

昭和三八年七月一九日の調査では

- 1 野尻町境別府南方の急流(高崎町笛水の北々東)
- 2 野尻町境別府南方の急流(高崎町笛水の北々東)  
の繁殖地を確認し、全年一一月二六、二七日の調査の結果
- 1 野尻ダム(野尻発電所)堰堤より下流五〇〇米迄の河川水域
- 2 新、旧両岩瀬橋間の水域
- 3 高原発電所ダム堰堤より阿母ヶ平温泉迄の急流水域

速〇、五十二米、水深一米以内)で、樹木や流域地勢に敵れない日照充分な陽光地を適地として生育する。水に洗われる岩石(殆んど砂岩)面に、葉状体から分泌する膠着性粘質物によつて圧着する。葉状体の一部は時に水中に伸び出してキノコ型となることもある。葉はこの葉状体上に点々と一ヶ所から簇生し針の様に細く、長さ四十五粂の小さいものである。茎は殆んどない。葉の脱落後その部分から花芽が伸長する。花は閉鎖花で閉じたまま受粉と受精を行ない、果実は黒褐色の腺脈をもつてゐる。開花期は一一月から一二月である。

の三ヶ所の繁殖地を今回新たに発見した。

これらの繁殖地のうち群落の大きいものは、岩瀬川の椎屋橋下流のもので、境別府および野尻ダム下流のものはやや劣り、岩瀬橋および、辻堂川の阿母ヶ平附近のものは著しく貧弱であった。この後期の調査中は西諸県地方のサツマイモ澱粉製造の廃液が著しく河川に放出され、この残滓の附着と河川の汚濁のために調査が困難であった。

なお、この両期の調査で繁殖を認めなかつた地域は次の通りであつた。

- 1 小林市陰陽石の上流二〇〇米と下流三〇〇米の間
- 2 小林市水ノ平橋より下流三〇〇米迄
- 3 小林市栗巣野一上之園間の橋の上下流各一〇〇米の間
- 4 高原町温谷より県道迄の辻堂川水域。
- 5 大淀川第一発電所ダム堰堤直下流（大淀川と岩瀬川の合流点で下流ダムのバツクウォーターダムで満水時流速消滅する。）

#### 四、由 来

このオオヨドカワ・ゴロモは昭和三年一二月京都大学教授今村駿一郎博士が、大淀川の上流、高岡町山下橋下流から、上流数糸にわたつて存在することを初めて発見された。その後続いて本河川の支流岩瀬川水域においても、同氏によつてその所在が確認された。その後河川の開発が急速に進み、大淀川第二堰堤（高岡町浦之名）が開設され、同堰堤下流は渴水と流速を失ない、又ダムによる水没と合して、山下から岩瀬川合流点迄約一糸の水域は完全に本植物を放逐絶滅させた。

昭和二八年一二月服部植物研究所清水大典氏は高崎町笛水の崎山において、又著者の一人中山は昭和三一年一一月野尻町椎屋橋附近および境別府の南方水域の繁殖地を、それぞれ岩瀬川水域で再発見

した。

昭和三五年前記今村駿一郎氏は京都大学農林生物学教室の学生〇名からなるカワゴケソウ科分布調査団を編成し、主として富嶽県内の諸河川について、同年八月一日より同月二〇日迄調査された。この調査諸河川を、県南部より北部にわたつて順次示すと次の通りである。

- 1 本城川 — 黒仁田川（山神と中蘭の間）  
—— 支流（権代の下一糸の点）
- 2 永田より一糸上流点
- 3 屋方の東五〇〇米の川（海岸より吉ヶ谷迄）
- 4 黒井の上流二糸より五〇〇米上流点から五〇〇米の間。
- 5 都井町東部より五〇〇米上流点から五〇〇米の間。
- 6 宮浦より一、五糸上流点
- 7 都井岬ソテツ林の三〇〇米の谷川
- 8 大納より一糸上流点から五〇〇米上流迄。
- 9 名谷より五〇〇米上流迄
- 10 市木川（平田と郡司部の間）
- 11 瀉上川（瀉川より大牟礼造）
- 12 大窪川（中溝上流一糸より五〇〇米の間、仏坂および茶園）
- 13 榎原川（橋之口の西一糸の点および奈留）
- 14 細田川（下塚田より五〇〇米上流点より三糸上流迄）
- 15 酒谷川（深瀬）
- 16 広渡川（郷之原の北西部の大屋曲点、坂元、宿野の上流一糸の点、黒仁田、田代、黒山および広河原と板谷間）
- 17 小吹毛井の上流一糸および二糸の両点。
- 18 宮浦の上流一糸および二糸の両点。
- 19 小月井の上流一糸の点。

富士の上流二糠の点および富士河内。

伊比井の上流四糠の点。

小内海の上流一糠と二糠の地点間

野島の上流一糠と二糠の地点間。

内海より四糠の両点間。

内海川 本流 内海より四糠上流点から二糠の間

支流、内海より一、五糠上流点から二糠の間

知福川 (内山より二糠上流点、支流を含む)

丸野の上流四糠より三、五糠の間

加江田川 一糠、塩鶴、九平附近の上下流一、五糠の間

本流、高城、仁君谷、神門又江原

仁君谷の分流、駄留および上流二糠の点

石河内より上流一糠の東部支流の二糠の間と春山  
支流、川南白鬚附近一糠

本流、市納および上流五〇〇米の点

平田川 支流、青鹿の南八〇〇米の点

名貫川名貫と八幡の間、轟、細、旧官行事務所上下流一糠

心見川 (征矢原より下流一、五糠迄)

石竈川 (水谷、丸山、井戸、上福原より一糠上流迄)

これら三一河川においてカワゴケソウ科の植物は発見されなかつた。

なお宮崎県五ヶ瀬川および大分県大野川においてはその調査地は不明であるが、調査の結果発見されなかつた記録がある。

## 五、証　徴

本植物に關係ある二、三の文献を示すと次の様である。

1 今村駿一郎 我日本ニテ始メテ発見セラレシ珍植物かはごけそ

う。植物研究雑誌、五巻、二号、五〇—六二頁、一九二八年（昭和三年）

2 新敏夫 カワゴロモ (*Hydroanzi ajaponica*) に就いて。広島文理科技大学・高等師範学校博物学会誌、一〇号、二八〇—三〇頁、一九四二年（昭和一七年）

3 新敏夫 日本及び中国のカワゴケソウ科新知見。植物研究雑誌、二九巻、三号、七三一—七八頁一九五四年（昭和二九年）

## 六、保存の要件

カワゴケソウ科の植物はアジアにおいては、インド、セイロン、ジヤワ、南支等の熱帯に産し、我日本の南九州迄の比島、台湾、琉球諸島では発見されていない。南九州と氣候的に類似の四国および紀州の各々南部でも発見されていない。南九州は本科植物の孤立的產地である。

九州山脈を分水界として東に流れる大淀川ではオオヨドカハゴロモを産し、西に流れる川内川ではカワゴケソウを産する。両河川は宮崎県西諸県郡飯野町八ノ峯附近を共通の分水界とし、両河川を連ねる線はカワゴケソウ科の分布北限線となつてゐる。

大淀川上流の山下において最初の発見が行なわれて以来、電源開発によるダム建設は一二糠に及ぶ自生地を絶滅したことは既述の通りである。更に昭和三九年着工の宮崎県営岩瀬川ダム開設によつて現在繁殖地である椎屋橋附近および笛水の生育地も水没し絶滅することは時間の問題となつた。残された野尻ダムおよび阿母ヶ平温泉附近の生育地迄は、最初の発見地山下から約二八糠で、この間の自生地を失うに至つた。残存する自生地は岩瀬川において約一糠弱、辻堂川において近々三〇米内外の一小極部に限られ、大淀川全生育地の二〇—三〇%に過ぎず、将来両支流の更に上流部における発見は殆んど期待されない状態である。これに加えて本河川上流地域におけるサツマイモ澱粉カス

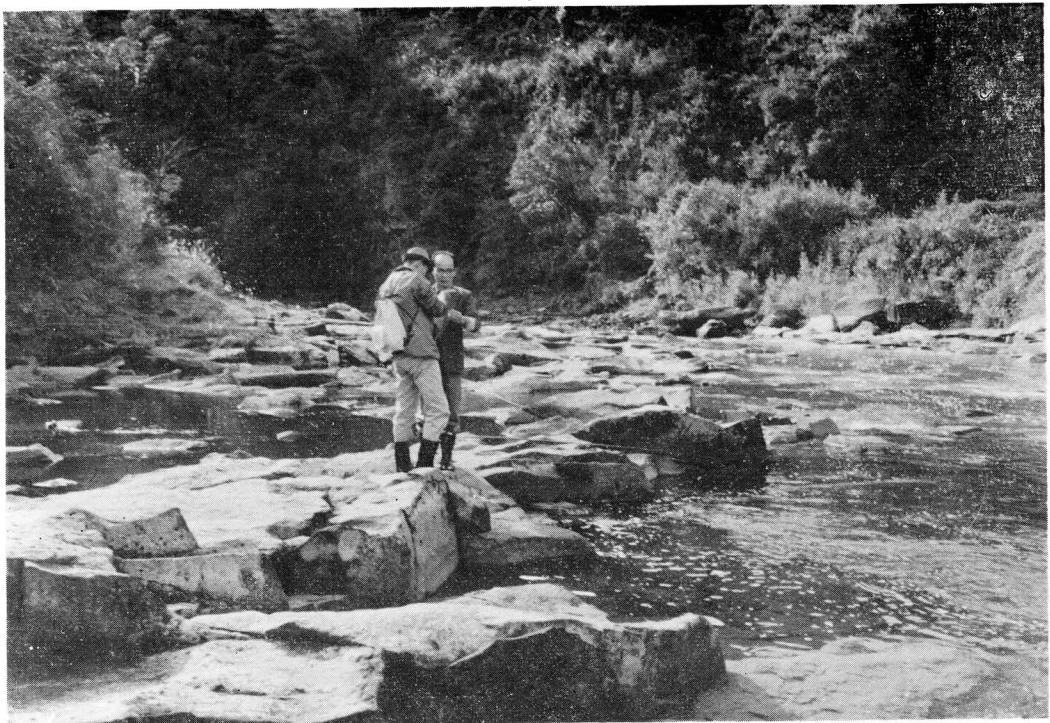
の無謀な放流やコンクリート工事による水質の汚濁は年と共に激しさを加え、ますます本植物の絶滅を早めている。残存自生地は機を失うことなく、早急に天然記念物として保存し、本植物の学術的価値を永久に後代に伝えなければならぬ。

オオヨドカワゴロモ保存の要件として次の事項をあげることができ

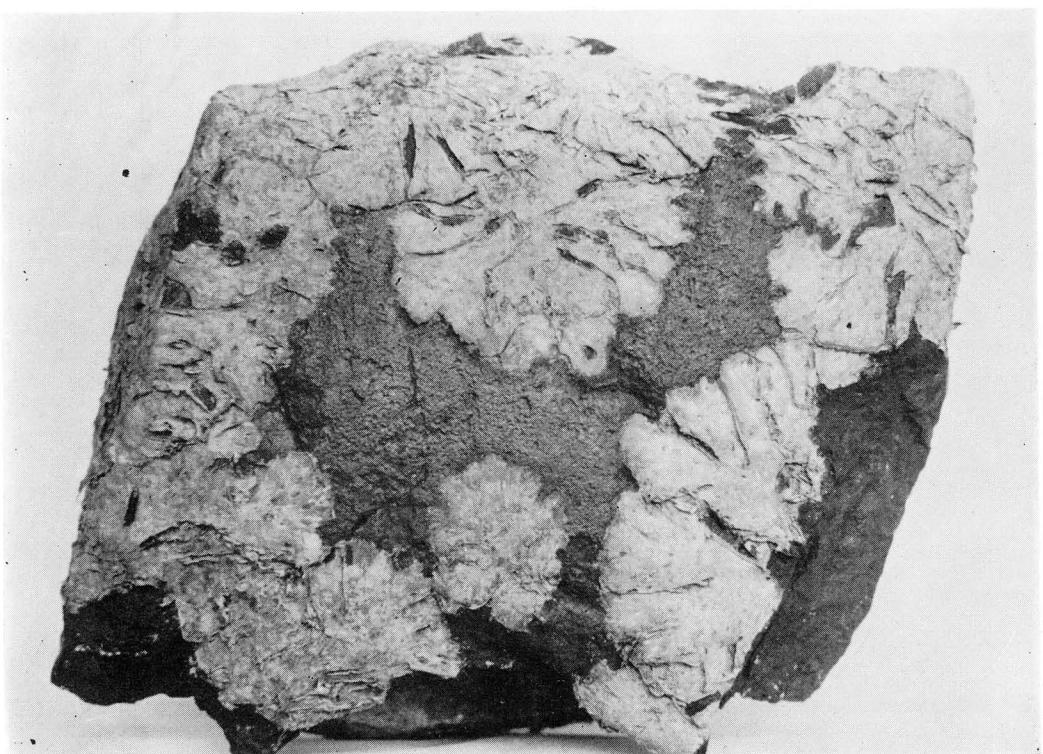
る。

- 1 大淀川のみに産する特産の植物である。
- 2 カワゴケソウ科植物中北米産の一種と共に最北限植物である。
- 3 河川開発、特にダム建設により絶滅の危険性がある。

文化財専門委員 平田正一  
宮崎大学助教授 中山至大



野尻ダム下流のオオヨドガワゴロモ自生地



砂岩に着生したオオヨドガワゴロモ





旧岩瀬橋下流のオオヨドガワゴロモ（新岩瀬橋より望む）



阿母ヶ平のオオヨドガワゴロモ自生水域

